

極小未熟児における就学前、 6歳時における発育、発達の評価について

(分担研究：ハイリスク児の地域ケアのあり方に関する研究)

研究協力者 山口 規容子

要約：東京女子医科大学母子総合医療センターにおいて管理された極小未熟児（出生体重1500g未満）8例について就学前6歳時に発育、発達の評価を行った。体格は、8例中7例が正常範囲であった。知能検査では、全例IQが85以上であったが、動作性IQ（PIQ）が高く、言語性IQ（VIQ）との差が著明であった。なお、神経学的症状については、微細運動障害、不器用、注意欠陥障害が、超未熟児（出生体重1000g未満）において高率に認められた。今後、特に超未熟児に関して、例数を重ねて就学後の学習障害の評価、その予測に関する検討の重要性が示唆された。

見出し語：極小未熟児、超未熟児、就学前発達評価、知能検査

研究方法

対象は、1986年10月から同年12月に出生し、当センターで管理された極小未熟児で、脳性麻痺、先天奇形、精神遅滞、視聴覚障害等の粗大な神経学的後障害を除く8例であった。全例、6歳から6歳1ヵ月に就学前健診として発育、発達の評価を施行した。

発育に関しては、診察及び身体計測、体重、身長、頭囲、胸囲の計測を行い、標準発育曲線の10パーセンタイル以上を持って正常とした。

発達に関しては、問診、診察、発達検査（WPPSI）によって、運動、精神発達、行動について評価した。

これら評価方法については、全て当分担研究グループにおいて作成された検査法に基づいて検査が実施された。

結果（表1参照）

極小未熟児8例のうち、出生体重1000g未満の超未熟児は3例であり、全例AFD（appropriate for dates）児であり、SFD児はなかった。

WPPSIによる知能検査においては、IQは全例85%以上で、平均は 104.6 ± 10.6 であったが、内容を分析すると、動作性IQ（PIQ）の平均が 118.5 ± 8.5 と、言語性IQ（VIQ）平均 90.25 ± 11.9 に比して著しい高値を示し、PIQとVIQの

差が著明であった。

運動に関する評価では、不器用（軽度上肢運動障害）、微細運動障害（軽度下肢運動障害）がそれぞれ3例において認められ、注意欠陥障害が2例に認められた。

体格については、体重、身長が正常範囲にあったのが8例中7例で、1例のみ小柄な体格を示した。

極小未熟児は、その極端な未熟性のために、発育、発達上の問題を示すことが少なくない。

我国では、短期予後、3歳位迄の評価は比較的多いが、就学時、或りは学童期における評価は極めて少ない。しかも、少数であるので妥当性を欠くことが少なくない。

今回の8症例の分析では、身体発育に関しては、ほぼ良好であり、精神発達に関しても知能検査によるIQでは、全例85以上の正常範囲にあった。しかし、内容分析において、言語性IQが動作性IQに比較して著明に低く、中でも超未熟児においてその傾向が著しかった。VIQとPIQのアンバランスは、将来の学習障害との関連性

を考慮すると今後の綿密な経過観察は是非必要である。

運動発達に関しては、症例1～3の超未熟児に不器用、微細運動障害が合併し、そのうち2例に注意欠陥障害が認められたが多動は伴わなかった。

これらの結果から、直ちに結論を導くのは差し控えるが、極小未熟児の中でも1000g未満の超未熟児については、より綿密な観察及び評価と長期観察の重要性が示唆された。

既に欧米における極小未熟児の長期追跡研究の中には、高率な学習障害を指摘している報告がある。

本研究の意義は、分担研究グループの多施設において、統一作成された検査法によって評価を行うことで、今後例数を重ねると、より良い現状分析が可能となり、今後の極小未熟児の就学後の学習、学校生活、行動に関して発達的特徴を理解した上で適切な治療的援助を行うことが出来るようになることが期待される。

表1 極小未熟児における6歳時の発育・発達

対象児	出生 体重(g)	妊娠 週数(週)	検査時 年齢	WPPSI知能検査			身体計測			神経学的異常	
				VIQ	PIQ	IQ	体重 (kg)	身長 (cm)	頭囲 (cm)		胸囲 (cm)
1 平○	800	25	6歳0月	79	121	99	20.4	110.7	51.0	53.0	不器用 微細運動障害 注意欠陥障害
2 鈴○	962	27.5	6歳0月	92	121	107	20.0	115.0	49.0	57.5	微細運動障害 発達言語障害
3 工○	790	26.6	6歳1月	70	109	86	14.2	101.8	49.0	51.0	不器用 微細運動障害 注意欠陥障害
4 吉○	1456	30	6歳0月	96	104	100	25.0	116.8	51.5	62.0	斜視
5 大○	1375	30	6歳0月	110	126	122	19.2	112.5	51.0	54.5	Ttc
6 三○	1020	26	6歳0月	86	112	98	18.4	110.7	52.5	53.8	不器用
7 片○	1270	29	6歳0月	87	129	109	18.8	112.0	51.8	53.4	
8 興○	1130	28	6歳0月	102	126	116	17.6	107.3	50.6	56.0	



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約：東京女子医科大学母子総合医療センターにおいて管理された極小未熟児(出生体重1500g未満)8例について就学前6歳時に発育、発達の評価を行った。体格は、8例中7例が正常範囲であった。知能検査では、全例IQが85以上であったが、動作性IQ(PIQ)が高く、言語性IQ(VIQ)との差が著明であった。

なお、神経学的症状については、微細運動障害、不器用、注意欠陥障害が、超未熟児(出生体重1000g未満)において高率に認められた。

今後、特に超未熟児に関して、例数を重ねて就学後の学習障害の評価、その予測に関する検討の重要性が示唆された。